

## 「権威についての問答」

2015年11月23日

ルカによる福音書 20章1節～8節。ある日、イエスが神殿の境内で民衆に教え、福音を告げ知らせておられると、祭司長や律法学者たちが、長老たちと一緒に近づいて来て、言った。「我々に言いなさい。何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのはだれか。」イエスはお答えになった。「では、わたしも一つ尋ねるから、それに答えなさい。ヨハネの洗礼は、天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。」彼らは相談した。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。『人からのものだ』と言えば、民衆はこぞって我々を石で殺すだろう。ヨハネを預言者だと信じ込んでいるのだから。」そこで彼らは、「どこからか、分からない」と答えた。すると、イエスは言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

主イエスはエルサレム神殿当局から命を狙われていたが、臆することなく毎日、境内で民衆に福音を語っていた。民衆は喜んで聞き入っていた。その時、神殿を司る祭司長、律法学者、長老たちが一緒に近づいて来て、主イエスに「我々に言いなさい。何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのはだれか」と詰問した。「このようなこと」とは境内で福音を語ることではない。境内は宗教教育、議論を自由にしてよい場であった。「このようなこと」とは、異邦人の庭で両替人やいけにえの動物を売る商人たちを暴力的に追い出した「宮清め」を指している。「宮清め」は、神殿当局にとってメンツが潰されることで、我慢ならないことであった。怒った彼らは主イエスに激しく問いかけた。主イエスは問いに直接答えず、逆に問い返している。「では、わたしも一つ尋ねるから、それに答えなさい。ヨハネの洗礼は、天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。」洗礼者ヨハネは天から遣わされた者であると答えれば、なぜ彼を信じ従わなかったのかと言われる。人からのものだと言えれば、ヨハネは民衆から絶大な尊敬を受け、預言者と信じられていたので、石を投げられ殺されるだろう。困惑した彼らは「天から」とも「人から」とも答えられず「どこからか、分からない」と言うしかなかった。主イエスは、それなら、何の権威によって「宮清め」をしたかを言うまいと答えられた。

この権威に関する問答は主体的な言葉を持たない者の姿を映し出している。祭司長、律法学者、長老たちは、エルサレム神殿を権威あるものとし、権力を集中させていた。そして、自分たちはその権威に与っている者と豪語していた。しかし、その権威は人間が作り上げた権力で、彼らは体制を守るために、権威にぶら下がっている者でしかなかった。自分の言葉を持つことができなかつたことは当然である。

律法学者だったパウロはクリスチャンを許せないと、エルサレム神殿の祭司長から権限、お墨付きをもらって迫害していた。ところが、クリスチャンになったパウロは血肉に相談することも、使徒となったペトロやヨハネなどからお墨付きをもらうために、エルサレム教会に行くこともなかった。人にも権威にも縛られないと書いている。人に寄りかかって立つ者は主体的な言葉を持たない。神を信じ従う者は自分の言葉を持つ。

私たちの回りで、権力、権威に寄り添うために言葉を変節した人々を多く、見聞きする。人は皆、自分の立っている所から言葉を発する。今日、責任ある言葉を持つことは容易ではないが、自分自身を失うようなことはしたくないと思う。